

男女共同参画の視点で

防災を考える

和光大学教授・中央区男女共同参画推進委員会副会長

竹信三恵子さんに聞く

東日本大震災から5年を迎えようとしています。震災の経験を踏まえ、防災や被災者の支援活動においては男女共同参画の視点が必要なが改めて認識されています。インタビューでは和光大学教授であり、東日本大震災女性支援ネットワーク共同代表を務めた竹信三恵子さんに、男女共同参画の視点が必要な背景らびに視点をいやすための取組みなどについて伺いました。

男女で異なる災害から 受ける影響

「災害に男性も女性もない」と思われがちですが、実際は、災害が起こると女性は男性よりも被害を受けやすく、避難所での生活や復興過程でも負担が大きくなりやすいなどの違いがあります。

一番の違いは、女性に炊き出しや子育て、介護などの労働が集中することです。平常時でもこれらの労働は主に女性が担っています。が、災害時になるとライフラインや物流が滞り、福祉や介護などの

サービスも止まるなどして、たちまち重労働になります。けれどもこうした生活関連の労働はもともと表に見えてこないため、災害時にそこを支援するということがなかなかできない。女性が声を出さないかぎり、必要な物資や支援が女性のところに届かない、生活関連に行き渡らないのです。

加えて、男性が担っているがれきの片づけや建設関係の労働には報酬がありますが、女性が担っている避難所での生活関連の労働は無償労働になります。被災者の女性の中には夫を亡くした人もいま

すが、無償労働をしていて避難所を出て仮設に移るための資金を稼げないという不安もあります。

もうひとつ、女性には暴力の被害があります。災害の時に性暴力が発生することは国際的に明らかになっていますが、日本でも災害時に強制わいせつを含めて女性への暴力が起きています。平常時でも声をあげにくい暴力ですが、災害時、被害者の避難や保護の仕組みが失われている中で、被害を訴えることができいません。

一方で男性の被災では「さびしい」「困っている」と弱音を吐けな

いケースがあります。また妻を失った場合、避難所で人間関係をつくることができずに、引きこもりや孤立につながる問題があります。

背景にあるのは固定的な 性別役割分担意識

こうした背景にあるのは平常時からの性別役割分担意識です。女性も男性も、女らしさ、男らしさに縛られ、困っていることを素直に言えません。女性は食事を作るのが当然とされ、みんなが頑張っている中で疲れたと言ったり、支援が欲しいと言うのはわがままだと思ってしまうのです。

被災後の雇用や就職活動にも性別役割分担は表れています。復興の過程で、稼ぎ手である男性の雇用は創出されましたが、女性ができる仕事がありませんでした。私は支援活動の中で厚生労働大臣に女性ができる軽作業の復興事業を要請したことがあります。子育てや介護のために職探しができなかった女性もいます。被災地から離れた場所でも、景気の後退を見越して女性の非正規雇用者が大量に解雇されたという問題もありますが、男性は労使交渉をしますが、

女性は、自分もまわりも家計補助のための仕事と思っているので解雇になっても何も言いません。性別役割分担が被災下で男女の雇用格差を生みだします。

男女共同参画の視点は生活者の視点であり災害弱者の視点でもある

東日本大震災では、女性への家庭的責任の集中のほかに衛生用品等の生活必需品の不足や授乳や着替えをするための場所がないといった男女のニーズの違いによる問題が生じました。防災に男女共同参



竹信三恵子さん

1953年生まれ。朝日新聞経済部記者、編集委員兼論説委員などを経て、2011年4月から和光大学教授。現在、中央区男女共同参画推進委員会副会長を務める。東日本大震災女性支援ネットワーク（2014年3月31日解散）共同代表。主な著書に『女性を活用する国、しない国』（岩波書店、2010年）、『災害支援に女性の視点を！』（赤石千衣子共編著、岩波書店、2012年）、『家事労働ハラスメント』（岩波新書、2013）などがある。

画の視点をもつことは、男性だけでは見落としがちな生活者の視点を入れることとなります。そして、女性は子ども、高齢者、障害者のケアを担うことが多いことから、災害弱者になりやすい人たちの声を反映することにもなります。男女共同参画による女性の視点からの防災、災害支援は、女性にとどまらず社会の中で権利を主張しにくい多様な人の意見を取り入れることでもあるのです。

女性リーダーを育てる

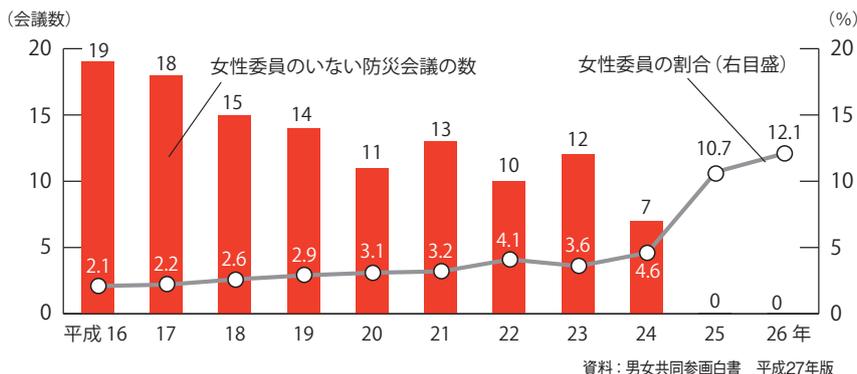
東日本大震災の経験を踏まえ、国では防災会議の女性委員の割合を3割以上にするよう働きかけています。これまでほとんど女性の参画がなかった防災分野に女性の意見を入れていくためです。ただ女性を入れればいいのかではなく、防災や災害支援に女性の視点の必要性が分かり、ネットワークをもって女性を入れることが大事です。そのためには、男女共同参画のいろいろなグループで防災について話し合い、事前に防災のための女性グループをつくっておくことです。そして、女性センターが中心になって、情報を受発信でき、会

議の運営やマネジメントなどのスキルをもった女性リーダーを育成していくことが大切です。そうしたリーダーは災害が起きた時に被害の情報や支援を必要とする人たちの声を集めて支援者に発信できるキーパーソンになります。支援を受けるにも力が必要であり、そこに男女共同参画の視点をもった女性が必要ということなのです。

身近なグループで防災をテーマに考えてみる

区民一人ひとりの取組みとしては、日常生活やそれぞれの活動の中で防災を意識することです。たとえば子育てサークルなどで防災をテーマに考えてみることです。子どもを連れて非常食などを入れた避難バッグを背負って「防災ピクニック」に行けばシミュレーションになります。何が足りないかすぐに分かります。区との連携があれば、シミュレーションから出てきた課題を共有することもできます。女性自身が防災を男性に任せるのではなく自分たちのこととして考え、学び、力をつけていくこと、そして男性は地域の防災活動に女性を入れていくことが大切です。

都道府県防災会議数と委員に占める女性の割合の推移



都道府県防災会議（全 47）で女性委員のいない会議の数は、平成 25 年にゼロになりました。

都道府県防災会議に占める女性委員の割合は増加傾向にあり、平成 26 年は 12.1%です。なお、中央区防災会議に占める女性委員の割合は平成 27 年 4 月 1 日現在 8.5%（委員総数 59 人中女性委員は 5 人）です。

高層住宅に住む子育て世帯の皆さんが考える防災

中央区では、集合住宅に居住する世帯が全世帯の約88%を占めています。座談会では、高層住宅に住む子育て世帯の皆さんに集まっていたいただき、日ごろの災害への備えや、子どもを持つ女性の視点から災害時に必要な取組みについてお話いただきました。また、座談会に先立ち、区の防災課から防災の取組みについて説明をしていただくとともに、防災拠点の一つである京華スクエアを見学しました。

■ 防災の備え

マンションならではの気がかりはありますか。皆さん何階に住んでいますか

赤木——9階に住んでいます。エレベーターが止まったときに心配です。階段の上り下りをしたことがないので、避難階段がどこにあるのか、開け閉めがどうなっているか、まずそれを確認したいと思います。家具は転倒防止をしていますが、寝室に危ないものを置かないようにしています。

高橋——11階に住んでいます。私もエレベーターが止まった時に、重いものを持ち運んだり子どもを抱えて階段を上り下りするのが心配です。家具は転倒防止が必要な高いものはありません。食器棚もつくりつけで揺れるとロックがかかるタイプです。

食料品など防災の備えをしていますか

宮川——5階です。大きい洋服ダンスと食器棚の固定は、震災の後に区のチラシをみて転倒防止器具を買いました。中央区では防災用品を安く斡旋してくれます。低い家具は何もやっていません。賃賃なのでなかなか難しいです。

吉浜——4階に住んでいます。家具にストッパーをつけています。食器棚も食器が飛び出すと怖いので転倒防止をしようと思いましたが、システムキッチンも引き出しが多いので中身が出てしまうと危ないと思いました。

吉浜——東日本大震災の直後は、水や非常食になるようなカップラーメン、乾麺、あと生理用品が不足すると聞いたので用意したりしましたが、時間が経ってしま

と賞味期限が切れたりでそのままになっていきます。持続しないですね。月初めに入れ替えをするとか、決めていかないといけないと思います。子どもが乳幼児の頃はスティックタイプの粉ミルクやおむつを用意していました。

高橋——今回お話を聞いて、災害のための備蓄や防災対策をしないことに気付きました。震災の直後はお水などもあったのですが、場所をとるのと賞味期限が切れてくると、怖かった気持ちもだんだん薄らいできて対策していないのが実情です。

赤木——うちもまったく対策していません。子どももまだ母乳だけなので考えたことがないです。3日分の備えが必要なのも、今日初めて聞きました。

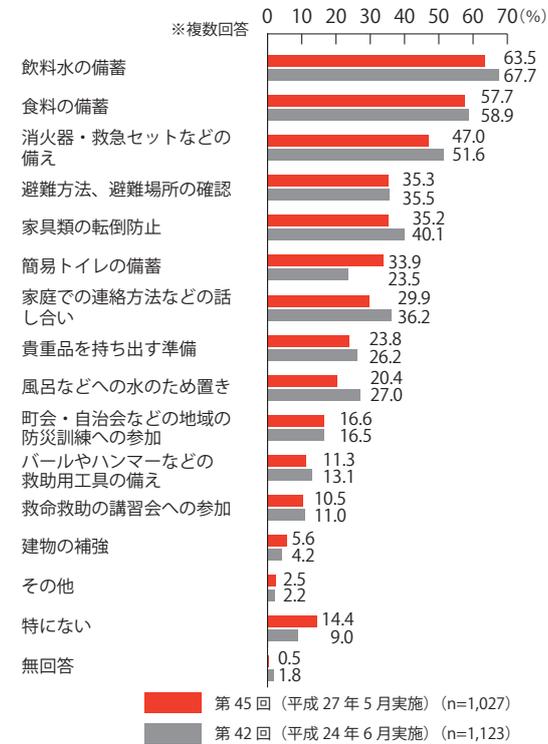
宮川——3日分の食料は用意していませんが、お鍋をよくするのでガスコンロがあつて、夏でも使え



宮川三和さん
(京橋地域在住)
お子さんは1歳

家庭での災害に対する備え

家庭での備えでは、「飲料水の備蓄」が6割を超え最も多くなっています。東日本大震災の翌年の平成24年と比べると、平成27年は多くの項目で備えが減少し、「特になし」が5.4ポイント増加しています。



資料：第45回中央区政世論調査、第42回中央区政世論調査



家族との連絡方法を決めていきますか

近所に祖母とおばが住んでいるのでそこをあてにしているところが大きいのですが、こちらがあてにされることもあるかと思えますので、その際には備蓄も揃えておかなければと思います。

宮川——夫は会社までは歩いて25分ですが、社外に出ているときの連絡方法や集合場所などを話し合おうと思います。

高橋——娘は来年から保育園に入るのですが、保育園との連絡手段が携帯電話なので、預けている

ときに災害が起きると連絡がとれるのかとか心配ですね。

吉浜——私も娘が来年から幼稚園に通いますので、災害時に離れていると心配です。

赤木——公衆電話は災害時でも使えるんですよ。

吉浜——いま公衆電話って見かけないですね。防災マップに載っているといいですね。自分がよく行く場所ですらそういう使えるものを把握しておくとうれしいです。

地域とのつながり

マンション内や地域に知り合いはいますか。マンション内の防災対策をご存じですか

高橋——児童館で同じマンションの方と知り合いになりました。まだ建物ができから1年経ってないので、管理組合で防災に関する取組みがなされています。

赤木——マンション内では一隣の方しか分かりません。管理組合で防災管理をやっていると思います。

宮川——マンション内に仲良く行き来したりする人がいないので不安ではあります。賃貸マンションなので管理組合がなくマンション自体に備蓄などありません。



吉浜 桜さん
(月島地域在住)
お子さんは3歳

吉浜——マンション内では上の階の方と隣の方は顔が分かる程度です。来年から娘が幼稚園に通うのでそこで皆さんとお知り合いになればお互いに情報交換できるかもしれないと期待しています。

管理組合では年に1回かなり大きな防災訓練をやっていて、地震の震度を体験できる車(起震車)がきたりします。大規模マンションなので炊き出しなどもあり、居住者だけでなく隣近所の人たちも参加できます。

近所のつながりはいかがですか。助ける立ち場、助けられる立場になるかもしれません

高橋——町会は管理組合で入っています。防災訓練もありますが出たことがないです。子どもが大きくなったときに夏祭りなどで地域に密着していくのかなと思います。

宮川——町会は昔から住んでいらっしゃる方がいますので、防災

のイベントもあります。自分自身の参加ができていません。もつと町会とつながりがあった方がいいのですが、下町ならではの結束感を感じて若い世代が入っていくのに一歩踏み出せないというのがあります。

ほかの町会は防災キャンプというのがある、そういう楽しそうな方には参加したいなと思います。町会ごとに差があるのでなく、どの町会も参加しやすいものがあるレベルであるといいですね。

赤木——私は地元のおじいちゃんおばあちゃんと仲良くなりたと思います。きっかけがあればお話しに行きたいです。高齢の方たちはいろいろな情報ももっていると思います。

吉浜——高齢の方は情報ももっている力が弱くなっているんですよ。そういうところは若い人がカバーするといいですね。



高橋友加里さん

(京橋地域在住)
お子さんは7カ月

防災に女性や子育て世帯の意見を反映するために

子育て世帯の皆さん同士で、防災について考えてみたことはありますか

宮川——防災について話し合う機会ってないですね。

児童館の避難訓練も移動だけで参加される方があまりいません。何か興味をもてるものがあるといいですね。

高橋——今日の試食会みたいのがあるといいですね。警報機が鳴って避難訓練だけでは今までと同じです。実際、今日、防災拠点を見学できたのはとても有意義でした。

赤木——子育て世帯ですと、外に出て情報を得た方がいいですね。家にも何も情報が入ってきません。お母さん同士で集まって話すようなサークルがあれば情報が得るのにいいと思います。参加型がいいです。お話もできて気分転換にもなります。

高橋——子どもができてからは責任感がだいぶ変わりました。

吉浜——何かきっかけがあれば話し合いにも出ると思います。きつ

かけが大事ですね。

これまで防災に必要だとも大人目線ばかりでしたが、子どもができるのと全然違ってきました。

国では、2020年までに市区町村も含めて防災委員の女性の割合を3割にしようとしています

宮川——3割って初めて聞きました。参加できるのなら参加したいです。これまで自分が受け身だったんだと、改めて感じています。

吉浜——委員会なども子育て世帯は夜でない方がいいですね。

高橋——託児がついているのがいいですね。託児つきで議論ができるのを知ったら参加する人は結構いると思います。場があれば出ると思います。

赤木——女性同士の方が言いやすいですね。困ったこととか男性には言いにくいことがあるので、やはりそういう女性のリーダー的存在が必要かなと思います。

吉浜——基本的に女性の方が男性よりもコミュニケーション力が高いですよ。

赤木——災害パンフレットなどももっと周知してもらいたいですね。皆さん、区がなんとかやってくれるだろうと思っていると思



赤木愛莉さん

(京橋地域在住)
お子さんは7カ月

ます。区や都がやってくれることと、自分たちでやることの役割分担を周知していくことが大事だと思います。

高橋——防災拠点の運営を自分たちですということも今日初めて知りました。災害が起きた時に急に「運営は住民」と言われたら戸惑います。避難訓練も必ず出なければならぬという感じがあります。住民にも責任があるということを知らせれば、皆さん避難訓練にも出ると思います。

宮川——防災拠点の運営マニュアルにも若い女性の視点が入っているといいですね。若い世代でないと、「私たちの若いころは我慢していた」、「必要なかったから」となるかもしれません。若い子育て世代の意見も入っていればいいな。いいだけでなく、自分たちが発信していくことが大事ですね。



中央区防災課から防災の取組みについてお話をいただきました。



防災拠点とは

■自宅での生活が困難な場合のみ防災拠点（避難所）に避難

自宅が倒壊、焼失などして自宅での生活が困難になったときは防災拠点（避難所）に避難します。防災拠点は区内に23か所あります。大規模な延焼火災が発生したときは広域避難場所（区内4か所）に避難します。

■防災拠点（避難所）は災害時の活動拠点

防災拠点は災害時のあらゆる活動拠点になります。1つは避難所としての機能です。東日本大震災の経験を踏まえて、女性の視点から乳幼児用や妊産婦用の部屋、目隠し用カーテンなどもあります。備蓄は生活必需品、食料など備蓄していますが、区民全員の分ではなく、避難者の分を準備しています。そのほかに、救護所、情報、地域の救援活動などの拠点となります。

■防災拠点（避難所）の運営は地域で行う

防災拠点の運営は行政ではなく、町会、自治会の防災区民組織の方々に運営していただくことになっています。運営マニュアルがあり、いろいろな手順が1つずつ写真入りで入っています。役員の方だけでなく、そこに来た方たちができるようにしています。年に1回防災訓練がありますので、是非参加してください。

家庭での備えは

■けがをしないこと、備蓄は水、食料、トイレを3日分

家庭で一番大事なことは怪我をしないことです。家具の転倒防止など家庭の中の危険を取り除いてください。次に、備蓄は3日間をしのぐ用意をお願いしています。水は1人1日3リットル最低3日分、食料は水と電気、ガスが使えなくても食べられるものを3日分、トイレも水を流さなくてすむようなトイレを3日分です。ごはんはガスコンロなどあればお湯を沸かせるので乾麺などでもかまいません。

■「わが家の地震防災計画」をつくってください

区では「わが家の地震防災計画」を1世帯1枚お配りしHPにも掲載しています。これをつくってご家庭内の目立つところに貼ってください。また、集合場所や連絡方法などご家族で話し合ってください。

お話を聞いて

高橋：マンションに住んでいる私たちは備蓄をしたり、電気が止まると水道も出ないのでしっかり対策をしなければいけないと気がきました。

宮川：自分で備蓄をしなければならぬと心新たにしました。
吉浜：備蓄の食材がものすごくバリエーションが豊富で驚きました。美味しかったです。

赤木：自分が住んでいるところの防災拠点が分かりましたし、地図を見ても中央区全域の防災のイメージがつかめました。

防災拠点を見学

京華スクエア（八丁堀地域の防災拠点）を見学しました



京華スクエアのロビー▶



◀京華スクエアの備蓄倉庫

美味しい!

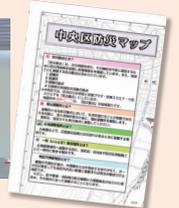
実際に非常食を試食してみました▶



◀お湯を注ぐだけで野菜たっぷりのシチューになりました

座談会では防災マップで自分の地域の防災拠点を確認しました▶

初めて知った



防災パンフレット「わが家がまちの地震防災」(1世帯1部ずつ配布)



『備えて安心! マンション防災』～震災時にも住み続けられる高層住宅～

※この用紙は、ご家庭内の目立つところへ掲示してください。

わが家の地震防災計画

地震 その時!!

★あつ地震だ! 大きいぞ!
★揺れが収まった……

★余震は続くが……

★避難が必要なときは……

①部屋でも外でもわが身の安全
②あわてず 家族の安全確認
③火の元確認
④出口の確保
⑤周囲の安全確認
⑥ラジオ・テレビで情報収集
⑦協力しあってご近所の救出・救護
⑧非常持出品の確認
⑨家族で確認 避難先とルート
⑩避難の前に安全確認 電気・ガス

備えのリスト

★火災を広げない、ケガをしないために

消火の備え 有効期限 年 月

家具類の転倒・落下・移動防止

ガラスの飛散防止

懐中電灯の備え

緊急告知ラジオ

建物の強度確認<耐震補強>

★被災後の生活のために

飲料水(0.5リットル36名 最低3日分) 有効期限 年 月

食料(最低3日分) 有効期限 年 月

簡易トイレ

非常持出品 (印鑑、権利書、現金、雨具など)

お薬手帳

★わが家独自に必要なもの

例)おむつ (3日分)

家族で決めたルール(集合場所・連絡方法)

防災拠点(避難所)

※防災拠点は、自宅が倒壊・焼失した場合などにより、自宅での生活が困難になったときに避難生活を送る場所です。

「中央区 わが家の地震防災計画」で検索できます▶

中央区 わが家の地震防災計画

検索

